安中城Ⅲ

－安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０２０

群馬県安中市教育委員会

序

安中市の南東部、碓氷山地の東端に位置する安中地区は碓氷川とその支流の九十九川が流れており、この２本の河川に挟まれた段丘上に安中城が位置しています。

このたび、安中市が計画した安中地区学童クラブ建設事業を行うにあたって安中城Ⅲの発掘調査を実施しました。安中城Ⅲの周辺では、平成23年度に安中市文化センター駐車場建設事業・安中市立安中小学校校舎建て替え事業に際して安中城Ⅰ・Ⅱの発掘調査を実施しました。その際には縄文時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が検出されております。今回の調査地である安中城Ⅲでは、中世から近世の安中城に伴う堀・土塁を確認することができました。本報告書はこの発掘調査の成果をまとめたものです。本報告書を学術分野あるいは地域の郷土史を学ぶ資料として活用していただけることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査に参加された皆様、報告書刊行に至るまでにご指導・ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げる次第です。

令和２年３月31日

安中市教育委員会
教育長　竹内　徹

例言

1　本書は安中市保健福祉部子ども課が計画した、安中地区学童クラブ建設事業に伴う安中城Ⅲ（略称：D－32）の発掘調査報告書である。
2　安中城Ⅲは安中市安中三丁目字西町21番１に所在し、調査面積は約455㎡である。
3　発掘調査及び資料整理は令和元年（平成31年度）に安中市教育委員会が直営で実施した。
4　発掘調査期間は令和元年５月７日から５月15日で、資料整理は令和元年５月16日から令和２年１月31日まで断続的に実施した。
5　調査組織

教育長	竹内　徹
教育部長	高橋　信秀
文化財保護課長	齊藤　勝彦
埋蔵文化財係長	井上　慎也（事務総括）
主事補	関根　史比古（発掘調査・資料整理担当）
主事補	鳥居　貴庸（発掘調査・資料整理担当）
発掘調査従事者	今井　保美、岩井　英雄、岩坂　康男、清水　正、村椿　健
資料整理従事者	大月　圭子、中里　徳子、廣上　良枝、町田　千明

6　本書の編集・執筆は関根・鳥居が行った。
7　遺構および遺物の写真撮影、遺物実測は関根・鳥居が行った。

８　発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

凡例

１　遺構実測図の縮尺は全体図：1/200、遺構断面図：1/120 とした。
２　遺構図中の北マークは磁北である。座標値は旧日本測地系である。
３　遺物実測図および遺物写真の縮尺は次のとおりである。
　・遺物： 1/2 ， 1/3
４　土層説明中での記号、略称は次のとおりである。
　・土層名称及び量の基準：「新版標準土色帖」による。
　・色調「＜」：より明るい方向を示す（暗＜明）
　・しまり、粘性　◎：あり　○：ややあり　△：あまりない　×：なし
　・混入物の量　　◎：大量（30 ～ 50%）　○：多量（15 ～ 25%）　△：少量（5 ～ 10%）
　　※：若干（1 ～ 3%）
　・混入物　　RP：ローム粒子（溶け込んだ状態）　RB：ロームブロック（固まりの状態）
５　本文・図面で示す火山灰の名称は、以下の記号を用いた。
　・浅間 A 軽石＝ As － A

目次

序
例言
凡例
第１章　発掘調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第３章　遺構と遺物・・　3

第４章　調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

写真図版

抄録

第1章　発掘調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

平成 31 年 4 月 2 日、安中市保健福祉部子ども課より安中市教育委員会文化財保護課に、安中地区学童クラブ建設事業に係る埋蔵文化財に関しての照会があった。開発予定地は、埋蔵文化財詳細分布調査等によって中・近世安中城の堀が廻っていたことが判明している。そのため、平成 31 年 4 月 3 日に埋蔵文化財発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成 31 年 4 月 9 日に子ども課より発掘調査依頼が提出された。これを受けて本遺跡を安中城Ⅲ（安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査）とし、令和元年 5 月 7 日から 5 月 15 日の期間で本調査を実施し、記録保存を図ることにした。

第2節　経過

今回の開発地域に安中城関連の堀が存在することは、安中城図や絵図と現在の地形を合わせ考えてみると､ほぼ確実であった。よって調査の主眼を堀の規模と走行を確認することに置いた。5 月 7 日にバックホーを搬入しトレンチの掘削を開始した。1 号トレンチは堀の位置と規模を確認するため、開発地東側、南北方向に設定した。1 号トレンチ北側で堀が確認でき、堀の底部まで完掘した。2・3・4 号トレンチは 1 号トレンチで確認した堀が廻る方向を確認するために設定し、堀の平面プランを確認した。

遺構の平面測量は平板測量を基本とし、スケールは全体図 1/100 とした。断面測量については原則 1/20 で行った。遺構の記録写真は、デジタルカメラと 35mm カラーフィルムで関根･鳥居が撮影を行った。作業風景等も適宜撮影した。全ての作業が終了した令和元年 5 月 15 日より埋め戻しを開始し、同日中に完了した。

第3節　基本層序

安中城Ⅲの層序については第 1 図の通りである。Ⅰ層の現代の耕作土を取り除くと、Ⅱ層とした As-A を含む層が部分的に確認できる。Ⅱ層が確認できない箇所については、上層であるⅠ層の耕作によって削平されたものと考えられる。Ⅱ層より下層は遺構内埋土となる。遺構の最下面ではⅢ層としたハードローム層が確認できた。遺構の確認はⅠ層・Ⅱ層（As-A を含む）を取り除いた面で行った。

第 1 図　安中城Ⅲ基本層序

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

安中市は群馬県の南西部に位置している。市内には、長野県との県境付近に源を発する碓氷川と、その支流である九十九川が西から東方向へ平行するように流れる。それぞれの河川の両側には河岸段丘が発達し、河川に並走するように丘陵が延びている。河岸段丘は下位段丘面（磯辺地区、人見地区）、中

位段丘面（原市・安中台地）、上位段丘面（横野台地）から成る。安中城Ⅲは、中位段丘面（安中面・原市面）の東端部分である安中市安中字西町に位置する。本遺跡の北側には九十九川との間に急峻な傾斜地が存在し、東側から南側にかけては北側よりゆるやかな傾斜地が存在する。このように遺跡地周辺は西側を除くと、河川と傾斜地に囲まれた要害の地である。

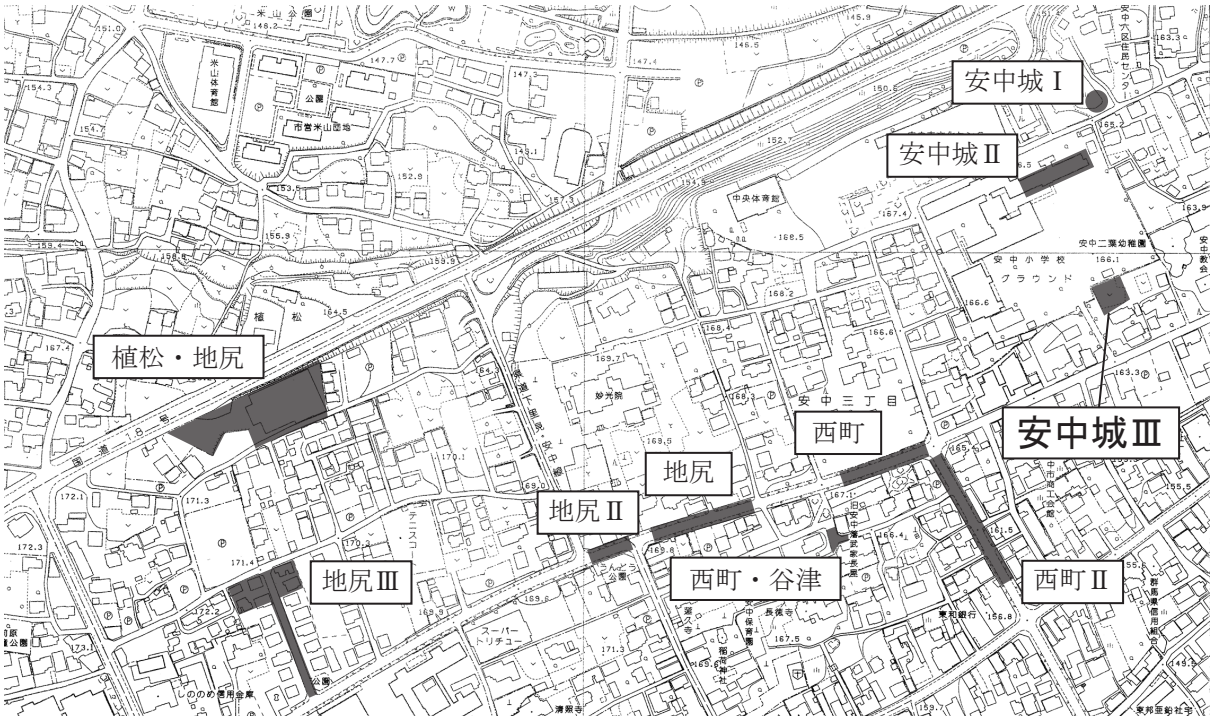
第2節　歴史的環境（第2図）

安中城Ⅲ周辺の遺跡について各時代を概観する。

旧石器時代の遺跡は確認できない。縄文時代は植松・地尻遺跡で草創期と推定される石器が出土したほか、中期の土坑と遺物が検出されている。また、西町・谷津遺跡では前期から後期にかけての土器が出土している。弥生時代から古墳時代にかけては植松・地尻遺跡があり、弥生時代中期後半と古墳時代の集落が確認されている。

古代（奈良・平安時代）は植松・地尻遺跡で「評」と記された刻書土器とともに、柱穴 140 基以上が検出され、掘立柱建物跡が複雑に重なり合っている様子が確認された。当遺跡は碓氷評家（郡家）の一施設または駅家と推定されている（関口 2003）。また地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡、地尻Ⅲ遺跡、植松・地尻遺跡では集落がみられる。

中世以降は、地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡、西町・谷津遺跡、安中城Ⅰ、Ⅱで安中城に関係する遺構が確認されている。地尻遺跡、地尻Ⅱ遺跡では戦国期と思われる大規模の堀が確認された。西町・谷津遺跡では永禄 2 年（1559 年）に安中忠政の築城時に形成されたと考えられる堀を検出した。安中城Ⅰ、Ⅱでは安中城の中世期の堀切と近世期の堀、石組・土塁状遺構、集石遺構、土坑などを検出した。この調査では中世期の堀切は人為的に埋め戻され、その一部は近世期の堀と重複する様子が確認された。



第２図　安中城調査位置図（S ＝ 1/6000）

第3章　遺構と遺物

第1節　遺構（第4～6図）

（1）調査の概要

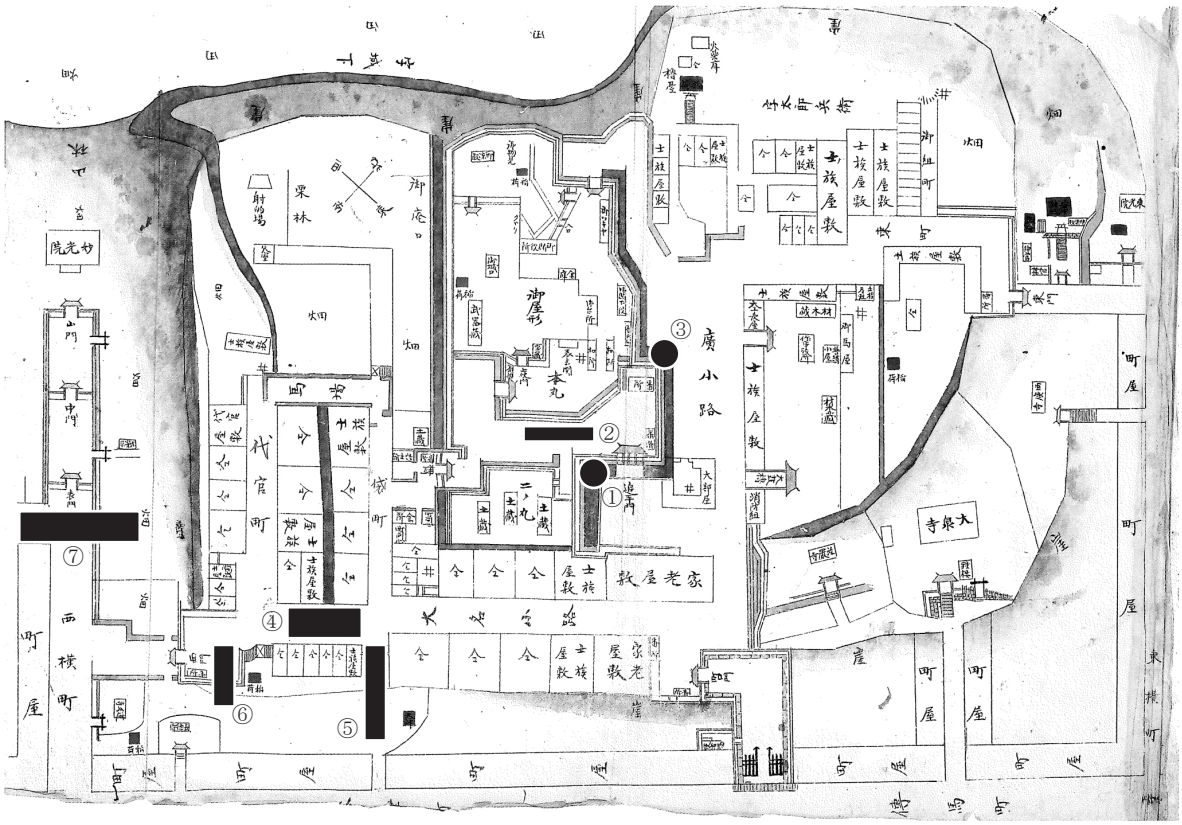
本調査区は、安中城図（第３図）および平成23年に安中市教育委員会でおこなわれた安中城Ⅰ・Ⅱの発掘調査成果から、安中城南側の堀に相当する場所であると想定された。調査区に該当する第３図-①の堀の走行状況をみると、東西方向から南向きに折れて廻ることが想定できる。そこで本発掘調査では、安中城南側堀の走行状況を把握することを主目的に、トレンチ発掘調査をおこなった。

調査成果から安中城における中世から近世にかけての堀の存在が確認できた。堀の走行は第３図とは異なり、調査区を東西方向に直線的に廻っていることが判明した（図4）。

（2）各トレンチの概要（第5図）

【第１トレンチ】

第１トレンチは第３図から想定される堀に直行させるように、調査区の北東端、南北方向に縦11m、横２ｍで設定した。はじめに、堀の全容を把握する目的でトレンチ北側部分（堀に該当する箇所）を



①安中城Ⅲ　②安中城Ⅱ　③安中城Ⅰ
④西町　⑤西町Ⅱ　⑥西町・谷津　⑦地尻、地尻Ⅱ

第３図　安中城図と調査箇所（『安中町郷土誌』より加筆して転載）

中心に掘削をおこなった。その結果、地表下 4m 付近で堀の底面を確認した。その後、堀の底面から延長させる形で南側を掘り進め、堀の立ち上がりを検出した。

第 1 トレンチ東側の土層断面（第 5 図）をみると、堀の南側に人口的に盛土をした痕跡が確認できた。この盛土がどの範囲まで延長するかを確認するため、トレンチ南方向に 4m ほど拡張した。その結果、盛土はトレンチ北端部から 13m 付近で切れることが判明した。

【第 2 トレンチ】

第 2 トレンチは、第 1 トレンチで検出した堀の走行状況を確認する目的で縦 6m、横 2m のトレンチを第 1 トレンチに直行させる形で設定した。第 2 トレンチは地表下 2m 付近まで掘り下げたが、第 1 トレンチで検出した堀の掘り方や盛土は確認できなかった。そのため、第 2 トレンチ全体が堀の内部に位置することが判明した。

【第 3 トレンチ】

第 3 トレンチは、縦 8.5m、横 1m のトレンチを調査区中央南北方向に設定した。本トレンチも第 1・2 トレンチ同様、堀の走行状況を確認する目的で設けており、第 3 図 - ①にあたる場所と想定された。掘削の結果、トレンチ北端部の地表下 1 m付近で東西方向に廻る堀の落ち込みを確認した。

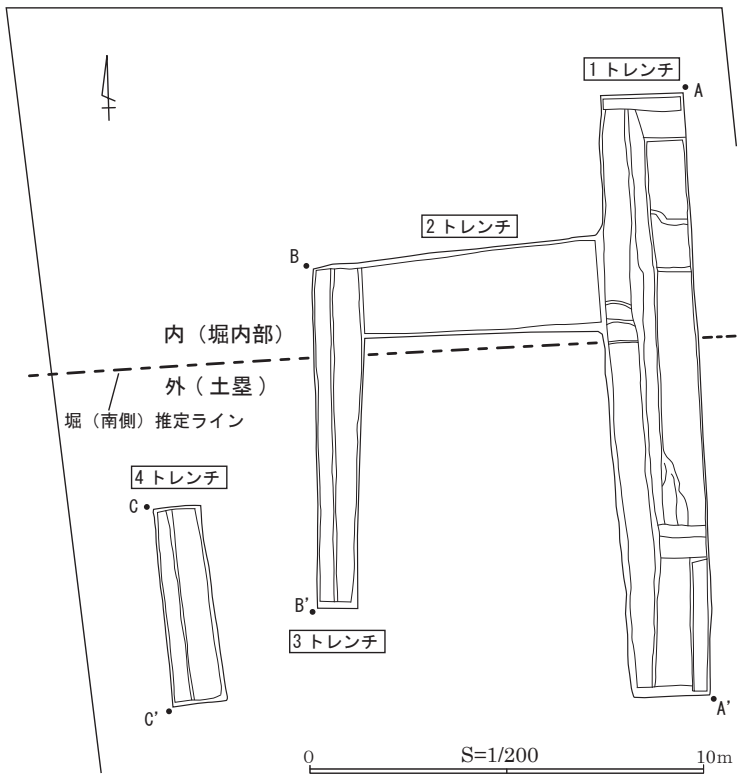
本トレンチの南側では、地表下 1m 付近で平坦な礫敷きの黄橙色土（図 5 中の 18）を検出した。表層に薄い黒色土が混じることから、堀が存在していた時期の地表面と推測した。

【第 4 トレンチ】

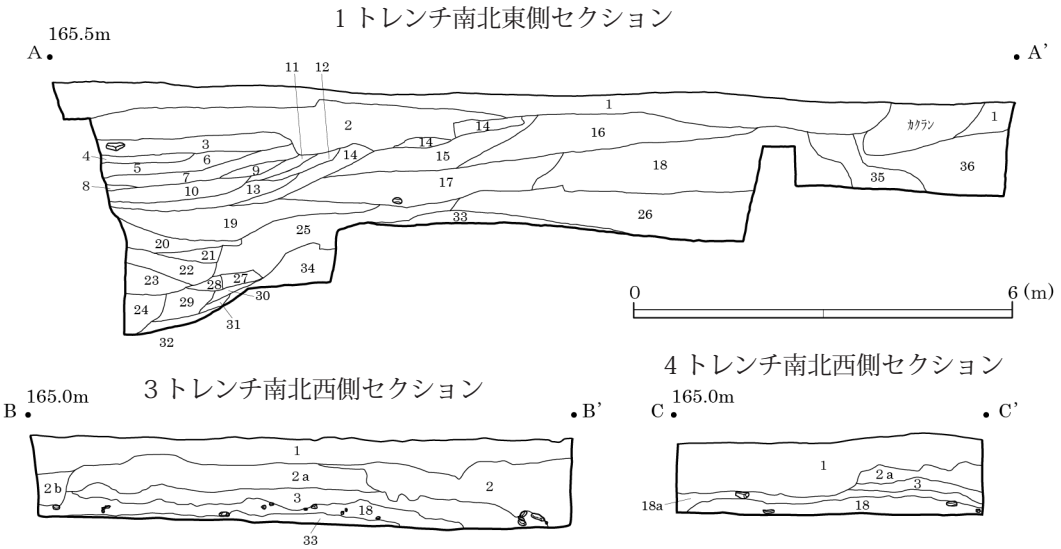
第 4 トレンチは、第 3 トレンチでは確認できなかったクランク状の堀を確認する目的で、調査区南西部分に縦 5m、横 1m で設定した。調査の結果、第 4 トレンチでは堀の落ち込みは確認できず、第 3 トレンチで検出した黄橙色土を呈す地表面を地表下 1m 付近で検出した。

（3）安中城Ⅲにおける堀の走行状況

第 1 ～ 4 トレンチの調査成果から、安中城南側の堀の走行状況が明らかとなった。第 3 図では、東西方向に堀が廻り、調査区の中ほどで南向きに直角に折れる堀の走行が想定されている。しかし、発掘調査では、第 3 図 - ①のような走行は確認できなかった。第 1 ～ 3 トレンチまでの様相をみると、堀は東西方向に廻っている。また、第 4 トレンチでは堀が確認できなったことから、本調査区おいて安中城南側の堀は、東西方向に直線的に廻っていたと推測される（図 4）。第 3 図に記される堀の走行は、調査区の範囲外であるか、検出した堀とは異なる時期のものと想定される。

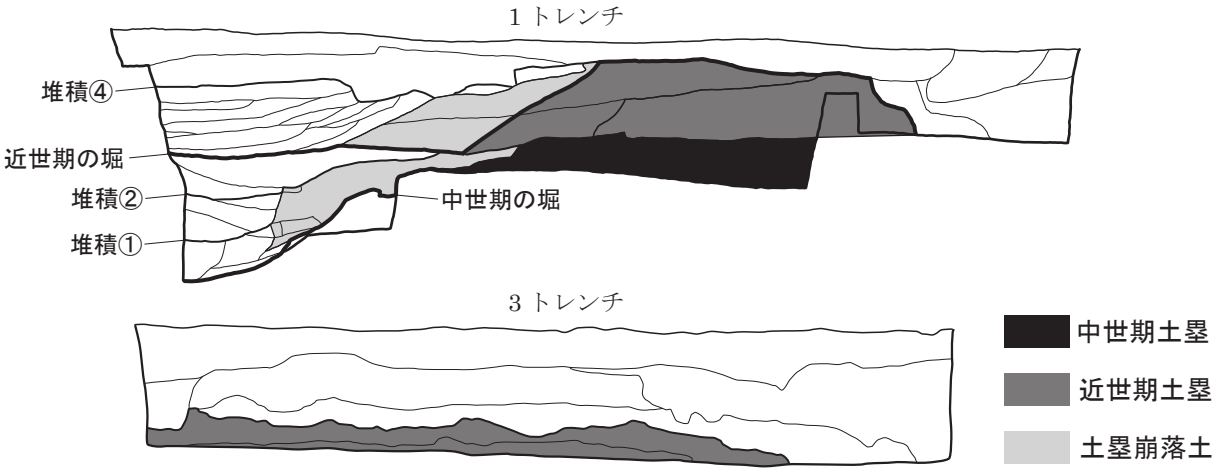


第 4 図　安中城Ⅲトレンチ配置図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 RB	混入物 As-A	備考
1 トレンチ	1	現耕作土							Ⅰ層に相当
	2	灰白色土層10YR	1＜2	×	×	×	×	◎	A軽石だまり
	3	黒色土層10YR	2＞3	○	○	※	※	×	
	4	黒褐色土層10YR	3＞4	○	○	※	※	×	
	5	黒褐色土層10YR	4＞5	○	○	※	×	×	
	6	淺黄色土層11YR	5＜6	△	○	◎	△	×	
	7	褐色土層10YR	6＜7	○	○	○	△	×	
	8	褐色土層10YR	7＜8	○	○	◎	○	×	
	9	黒褐色土層10YR	8＞9	△	△	◎	◎	×	
	10	褐色土層10YR	9＜10	△	○	○	○	×	
	11	褐色土層10YR	10＜11	△	△	○	○	×	
	12	黒色土層10YR	11＞12	△	△	◎	◎	×	
	13	淺黄色土層11YR	12＜13	△	△	◎	◎	×	
	14	黒褐色土層10YR	13＞14	△	△	×	×	△	Ⅱ層に相当か
	15	黄橙色土層10YR	14＜15	△	○	◎	◎	×	黒色土が多量に混じる
	16	黄橙色土層10YR	15＞16	△	○	◎	◎	×	黒色土が多量に混じる
	17	黄橙色土層10YR	16＜17	○	○	◎	◎	×	黒色土が少量に混じる
	18	黄橙色土層10YR	17＜18	◎	○	◎	◎	×	
	19	黒色土層10YR	18＞19	△	△	△	△	×	
	20	黄褐色土層10YR	19＜20	△	△	○	△	×	黒色土が少量に混じる
	21	黄褐色土層10YR	20＞21	△	△	○	×	×	黒色土が多量に混じる
	22	黄褐色土層10YR	21＜22	△	△	○	×	×	黒色土が多量に混じる
	23	黄褐色土層10YR	22＜23	△	△	◎	○	×	
	24	黒色土層10YR	23＞24	○	○	※	×	×	
	25	黒褐色土層10YR	24＜25	○	△	◎	△	×	
	26	黒褐色土層10YR	25＜26	○	△	◎	○	×	
	27	黒褐色土層10YR	26＜27	△	△	◎	◎	×	
	28	明黄褐色土層10YR	27＜28	△	△	×	○	×	黒色土が少量に混じる
	29	黒褐色土層10YR	28＞29	○	○	○	○	×	
	30	明黄褐色土層10YR	29＜30	○	○	◎	◎	×	
	31	黒色土層10YR	31＞32	○	○	○	○	×	
	32	明黄褐色土層10YR	31＜32	○	○	◎	◎	×	黒色土が多量に混じる
	33	明黄褐色土層10YR	32＜33	△	△	×	×	×	黒色土が多量に混じる
	34	明黄褐色土層10YR	33＜34	×	×	×	×	×	Ⅲ層に相当
	35	明黄褐色土層10YR	34＞35	△	△	◎	◎	×	黒色土が多量に混じる
	36	黒色土層10YR	35＞36	○	△	◎	○	×	
3 トレンチ	1	現耕作土							Ⅰ層に相当
	2	暗褐色土層10YR	1＞2	△	×	×	×	○	
	2a	暗褐色土層10YR	2＞2a	×	×	×	×	◎	A軽石だまり
	2b	暗褐色土層10YR	2a＝2b	×	×	×	×	○	
	3	暗褐色土層10YR	2b＜3	○	○	※	△	×	
	18	黄橙色土層10YR		◎	○	○	◎	×	こぶし大の礫を多く含む。黒色土が上層に堆積する
	33	黄橙色土層10YR	16＜33	◎	◎	◎	◎	×	
4 トレンチ	1	現耕作土							Ⅰ層に相当
	2a	灰白色土層10YR	1＜2a	×	×	○	×	◎	A軽石だまり
	3	暗褐色土層10YR	2a＜3	○	○	△	×	×	
	18a	暗褐色土層10YR	3＜18a	△	○	◎	○	×	黒色土が多量に混じる
	18	黄橙色土層10YR	18a＜18	◎	○	×	◎	×	黒色土が多量に混じる

第５図　第１・３・４土層断面図（S ＝ 1/120）



第 6 図　堀の形態と堆積過程

第2節　遺物（第7～9図）

（1）遺物の概要

安中城Ⅲでは、中世期と近世期に城郭を廻っていたと考えられる堀跡を検出した。遺物は近世期の堀の覆土から出土しており、遺構に伴うものはない。近世期の堀跡より下層では、須恵器片 2 点（第 9 図 - 60、61）を除いて、遺物は確認できなかった。

検出した主な遺物は陶磁器、土師質土器、須恵器、土師器、硯、瓦である。このうち陶磁器、土師質土器などの 18 世紀から 19 世紀の遺物が多数を占める。17 世紀に比定される肥前系の中皿 1 点（第 8 図 - 29）と志野焼きの皿 2 点（第 8 図 - 33・34）も確認されるが、遺物組成ではごく少数である。

陶磁器、土師質土器の主な産地は瀬戸・美濃、肥前系が最も多くの割合を占める。その他には萩系の碗 1 点（第 8 図 - 25）、益子・相馬系の蓋 1 点（第 8 図 - 41）、信楽系の小杯 2 点（第 7 図 - 2・4）が確認できる。

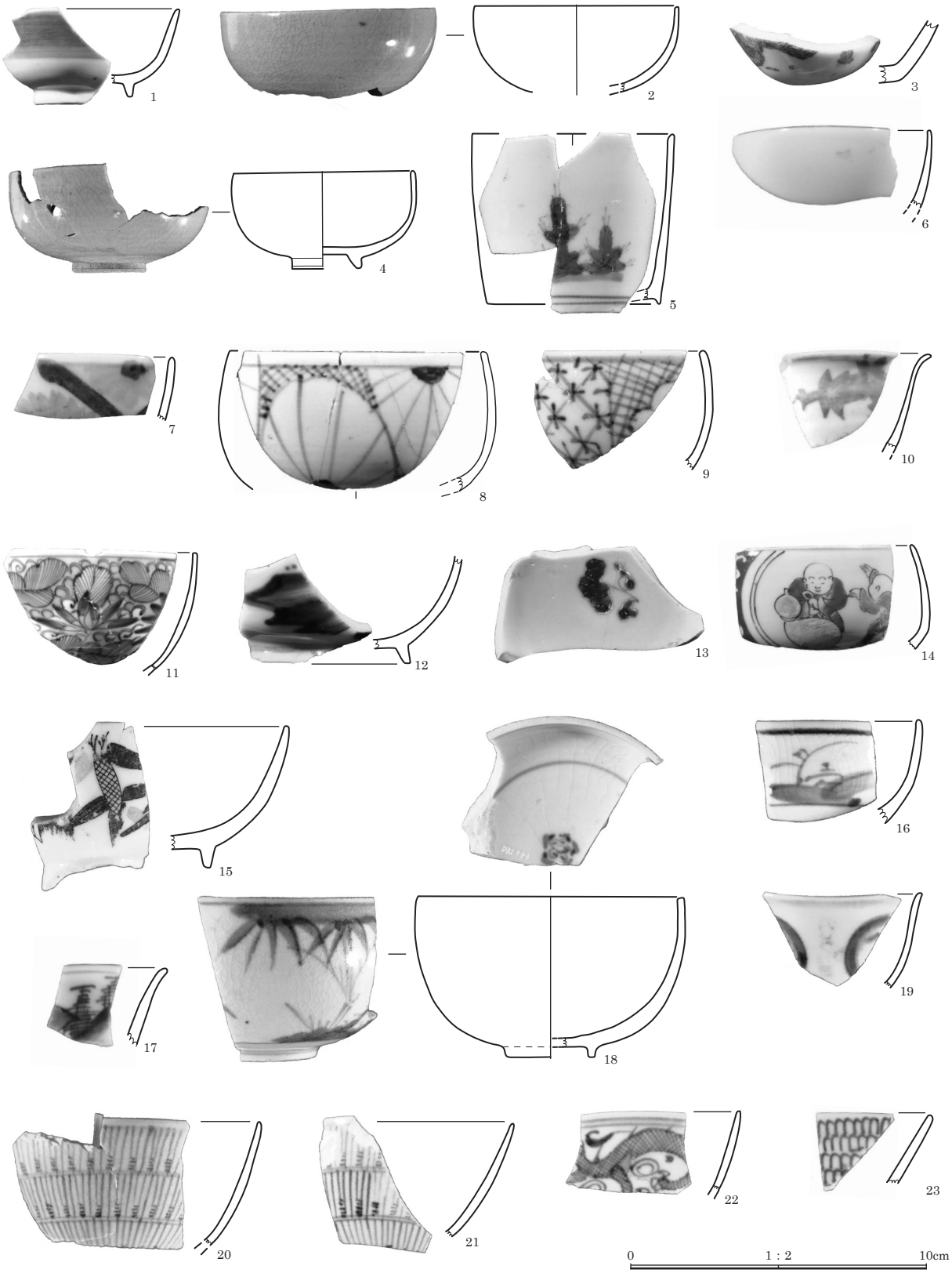
また、若干数ではあるが、須恵器や土師器も確認された。須恵器は合計 5 点あるうち、10 世紀頃に比定される高台付きの碗（第 9 図 - 57）と 8 世紀頃に比定される蓋（第 9 図 - 61）が確認できる。土師器では 4 世紀頃に比定される高坏も確認された（第 9 図 - 54）。

（2）安中城Ⅲにおける遺物総括

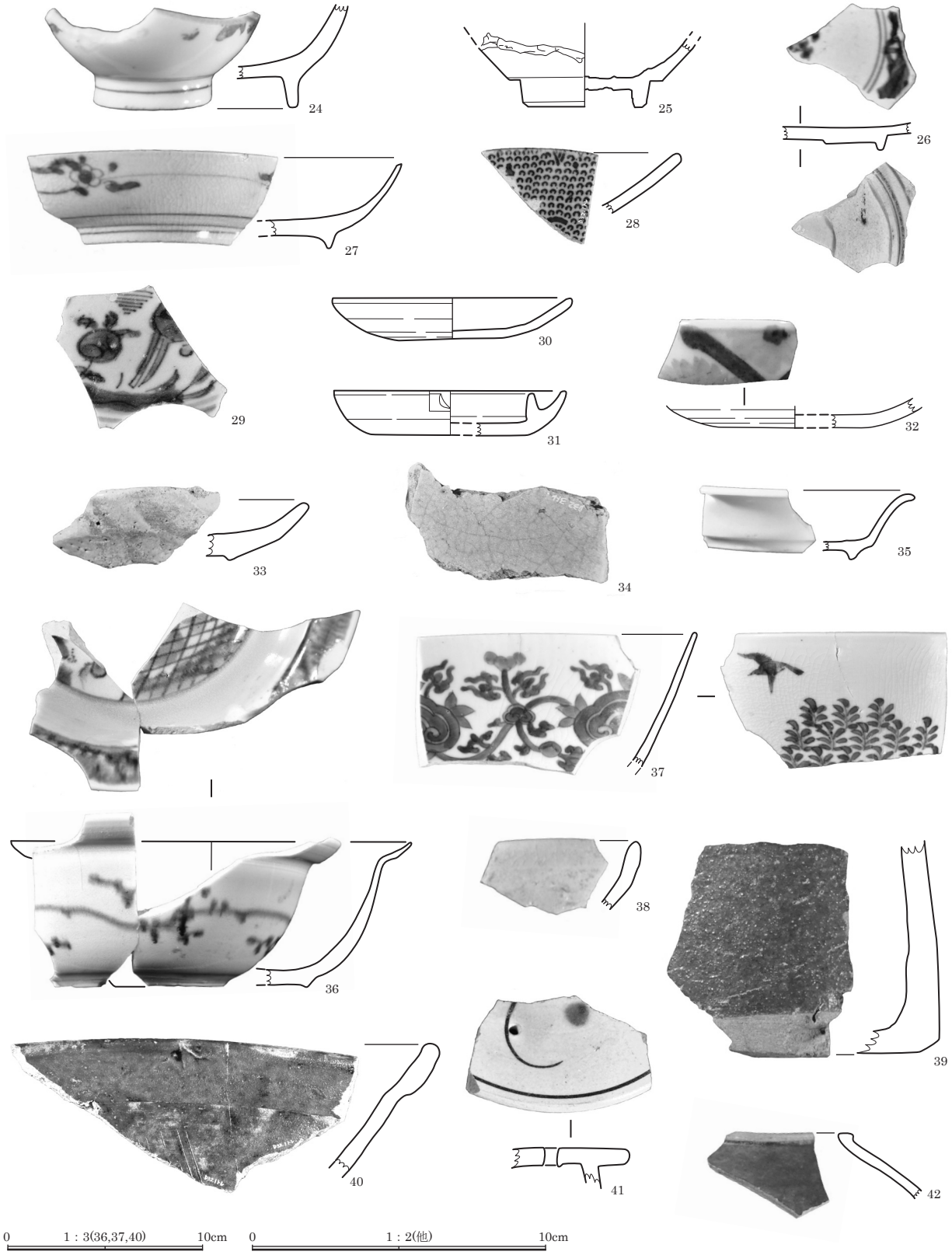
安中城Ⅲの出土遺物の大半は、おおよそ 18 世紀後半から 19 世紀初頭に比定される陶磁器や土師質土器であった。これらのなかには 17 世紀代の遺物も数点確認される。これらの遺物は出土位置が近世期の堀の覆土であることから、18 世紀から 19 世紀まで伝世したものと考えられる。

須恵器、土師器には上述の時期とは大きく異なるものが確認できる。これらの出土位置は、近世期の堀の覆土もしくは人口的に造成された盛土の中であることから、混入とみるのが自然である。

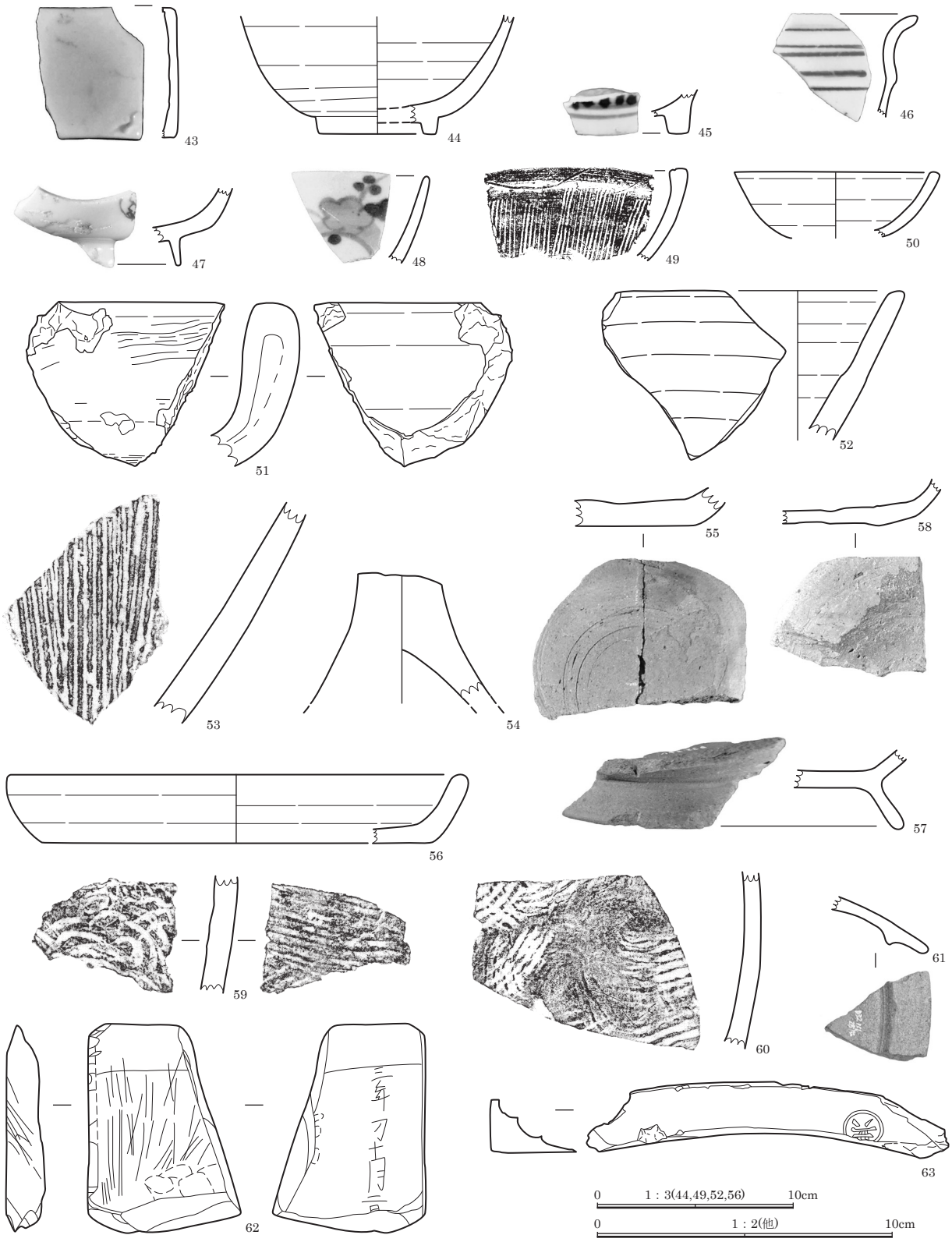
遺物が出土した近世期の堀は、天明 3 年（1783 年）の浅間山の噴火後に一定期間を経て埋没したことが、堀の覆土堆積状況から理解できる。本発掘調査における出土遺物の帰属時期を遺物組成からみた際、基本的に 18 世紀後半から 19 世紀初頭に位置づけられる。したがって、安中城Ⅲの遺物は近世期の堀が埋没する過程で廃棄されたものと想定される。



第７図　安中城Ⅲ出土遺物①



第８図　安中城Ⅲ出土遺物②



第９図　安中城Ⅲ出土遺物③

遺 物 観 察 表

陶 磁 器

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	生産地	年代	備考
			器高	口径	底径				
1	染付	猪口	3.3	——	2.0	4トレ	瀬戸・美濃	19世紀	
2	磁器	小杯	——	7.9	——	2トレ	信楽系	18世紀代？	
3	染付	小杯	——	——	——	2トレ		明治以降	銅版転写
4	磁器	小杯	3.1	6.5	2.4	2トレ	信楽系	18世紀代？	内面に染料？が付着している
5	染付	小杯	5.8	6.8	3.6	3トレ	肥前系	17世紀末～18世紀	
6	染付	小杯	——	7.0	——	4トレ		18世紀後半～19世紀初頭	口銹
7	染付	小碗	——	8.0	——	1トレ	肥前系	18世紀後半か？	
8	染付	小碗	——	9.0	——	3トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	
9	染付	小碗	——	6.6	——	3トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	
10	染付	小碗	——	6.6	——	3トレ	瀬戸・美濃系	19世紀第1四半期～第3四半期	
11	染付	小碗	——	8.2	——	3トレ	肥前系	18世紀後半	
12	染付	小碗	——	——	2.6	3トレ	瀬戸・美濃系	19世紀	
13	染付	小碗	——	——	3.1	3トレ	瀬戸・美濃系？		
14	染付	小碗	——	7.0	——	3トレ		明治以降	色絵磁器
15	染付	小碗	——	——	2.8	3トレ		明治以降	銅板転写
16	磁器	小碗	——	——	——	3トレ	瀬戸・美濃か		呉須絵
17	染付	小碗	——	9.0	——	4トレ	瀬戸・美濃系	19世紀	
18	染付	小碗	5.0	9.0	3.0	4トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	見込手描五弁花
19	染付	小碗	——	9.0	——	4トレ	瀬戸・美濃系	19世紀第1四半期～第3四半期	
20	染付	中碗	——	10.0	——	3トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	21と同一個体
21	染付	中碗	——	——	——	3トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	20と同一個体
22	染付	中碗	——	11.0	——	4トレ	肥前系	19世紀前半	
23	染付	中碗	——	11.0	——	4トレ	肥前系	18世紀末～19世紀後半	
24	染付	碗	——	——	3.3	3トレ		明治以降	銅版転写
25	磁器	碗	——	——	4.1	3トレ	萩系	19世紀	
26	染付	小皿	——	——	7.2	3トレ	肥前系	18世紀後半～19世紀初頭	蛇ノ目凹型高台
27	染付	小皿	2.5	14.0	8.0	4トレ		18世紀後半～19世紀初頭	口銹
28	染付	中皿	——	19.0	——	1トレ	肥前系	19世紀	
29	染付	中皿	——	——	12.0	2トレ	肥前	17世紀中頃	
30		灯明皿	1.6	8.1	3.7	3トレ	瀬戸・美濃系	18世紀末～19世紀	錆釉
31		灯明皿	1.7	8.0	5.0	3トレ	瀬戸・美濃系	18世紀末～19世紀	錆釉
32		灯明皿	——	——	5.0	4トレ	瀬戸・美濃系	18世紀末～19世紀	錆釉
33	陶器	皿	——	——	——	3トレ	美濃系	17世紀	志野焼き
34	陶器	皿	——	——	5.1	3トレ	美濃系	17世紀	志野焼き
35	白磁	皿	——	9.0	6.4	3トレ		19世紀	
36	染付	鉢	——	20.0	5.3	2トレ		18世紀以降	青磁　二個体つく
37	染付	鉢	——	19.0	——	3トレ	肥前		
38	陶器	鉢	——	——	——	3トレ	瀬戸・美濃	18世紀後半～19世紀初頭	灰釉
39	陶器	鉢	——	——	——	3トレ		18世紀以降	錆釉
40	陶器	擂鉢	——	——	——	1トレ	瀬戸・美濃	18世紀後半～19世紀初頭	錆釉
41	陶器	蓋	——	——	——	3トレ	益子・相馬系	18世紀以降	三彩
42	陶器	小壷	——	——	——	3トレ		明治以降	塩釉
43	磁器	水滴(蓋)	——	——	——	3トレ		明治以降	
44	陶器	片口	——	——	6.0	3トレ		18世紀後半以降	透明釉、内面にトチンの痕跡あり
45	磁器		——	——	——	2トレ			高台部分
46	磁器	香炉か	——	——	——	3トレ			口縁部が若干残存、色絵磁器、赤い線が口縁に対して平行に5条描かれる。
47	磁器		——	——	——	3トレ			色絵磁器、高さ1cm程度の高台が付く
48	磁器		——	——	——	3トレ	肥前		
49	陶器	擂鉢	——	21.0	——	4トレ	丹波	18世紀中頃	ロクロ成形、7本歯櫛目、外面：黄褐色、内面：褐灰色

土 師 質 土 器

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	年代	備考
			器高	口径	底径			
50	土師質	坏	——	7.0	——	3トレ		ロクロ成形
51	土師質	鉢	——	25.0	——	2トレ		ロクロ成形
52	土師質	鉢	——	——	38.0	1トレ		ロクロ成形
53	土師質	擂鉢	——	——	——	4トレ	天明～明治	還元焼成、ロクロ成形、7本歯櫛目、境または明石産
54	土師器	高坏	——	——	——	2トレ	4世紀代	脚部
55	土師質	皿	——	——	6.0	1トレ25層		ロクロ成形、底部回転糸切
56	土師質	焙烙	——	——	20.0	3トレ		ロクロ成形

須 恵 器

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	年代	備考
			器高	口径	底径			
57	須恵器	高台付碗	——	——	10.0	3トレ	10世紀後半	高台部、ロクロ成形、底部切り離し法不明、高台貼り付け
58	須恵器	坏or皿？	——	——	——	3トレ		底部、ロクロ成形、底部切り離し法不明
59	須恵器	壺or甕？	——	——	——	3トレ		胴部、外面：平行叩き目、内面：同心円状叩き目
60	須恵器	壺or甕？	——	——	——	1トレ25層		胴部、ロクロ成形、外面：平行叩き目、内面：同心円状叩き目
61	須恵器	蓋	——	18.0	——	1トレ25層	8世紀	ロクロ成形

そ の 他

遺物番号	種別	器種	法量(cm)			出土位置	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
62	硯					3トレ	刻印(裏面):「三年刀十月二日」
63	瓦	桟瓦	2.9	12.1	1.5	3トレ	刻印:「共」

第4章　調査のまとめ

今回の調査は面積が狭小であったものの、安中城Ⅰ・Ⅱに続き、安中城本丸南側の調査を行うことができた。その結果、中世期から近世期にかけて形成されたと考えられる堀・盛土を検出した。1トレンチの土層断面図から、この堀は複数回にかけて埋没し、盛土も崩落・再形成を繰り返したことが伺え、土塁であったと想定する。

堀の最底面は地表下約4mであり、対応する盛土との高低差を考えると、急傾斜な深い堀である。出土遺物は見られないものの、こうした堀の形状から、この段階の堀・盛土は中世期に形成されたものと考えられる。続く段階の堀が形成される際には中世期の堀は既に埋没して平坦地となり、中世期の盛土であった部分へ再度盛土を行うことで、堀・土塁を形成していたと考えられる。この段階の堀は、天明3年の浅間山噴火（1783年）に前後して複数回の小規模な埋没が起こり、最終的には完全に埋没したと考えられる。本遺跡の遺物の多くは、この浅間山噴火に前後した埋没過程で投棄されたものであろう。

次に、文献史料・絵図等の確認を行う。安中城は永禄2年（1559年）に安中忠政によって築城された（山崎1978）。しかし、長篠の戦い（1575年）によって安中氏が滅亡すると、「安中亡び落城の跡、安中討死の末葉の士、民となり、武家・百姓の田畑作り場」（『上野志』）であったとされる。中世期の安中城に関する絵図等はなく、城の全体像は不明な部分が多い。続く江戸時代には井伊氏が当地を治めることとなり、元和元年（1615年）には井伊直勝が城の普請を行った（淡路1981）。井伊氏より数代後に城主となった内藤政森は在職期間中（宝永二年～享保十八年（1705～1733年））に安中城の改修を行い、城内に堀を再構築した（淡路1981）。

以上、文献史と本発掘成果を照らし合わせると、中世の堀・盛土は安中氏時代に構築されたものと推測される。近世期の堀・盛土は、井伊氏または内藤氏のどちらかが改修した際のものと考えられるが、特定することは困難である。いずれにせよ、覆土の遺物は18世紀後半から19世紀初頭のものが大半であることから、古くともこの時期には埋没が始まっていたと想定でき、おそらく天明3年（1783年）の浅間山噴火が画期であろう。なお、内藤期や明治期の絵図と本調査で判明した堀の走行状況は異なり、当時の堀・土塁の実態については今後の調査における課題である。

本遺跡の発掘調査の際には淡路博和氏にお越しいただき、ご指導を賜った。また、出土遺物のうち、陶磁器に関しては大西雅広氏から多くのご教示いただいた。ここに記して感謝の意を示したい。

参考・引用文献

淡路博和1981「安中藩」『上州の諸藩』（上）上毛新聞社

井上慎也・深町真2005『植松・地尻遺跡』安中市埋蔵文化財発掘調査団

壁　伸明2011『安中城Ⅰ・Ⅱ』安中市教育委員会

関口功一2003「第五章 奈良・平安時代」『安中市史』第二巻通史編 安中市市史刊行委員会

千田茂雄1990『西町・谷津遺跡』安中市教育委員会

千田茂雄1991『地尻・地尻Ⅱ遺跡』安中市教育委員会

山崎　一1978『群馬県古城塁址の研究』群馬県文化事業振興会

写真１　１トレンチ全景

写真２　３トレンチセクション

写真３　４トレンチセクション

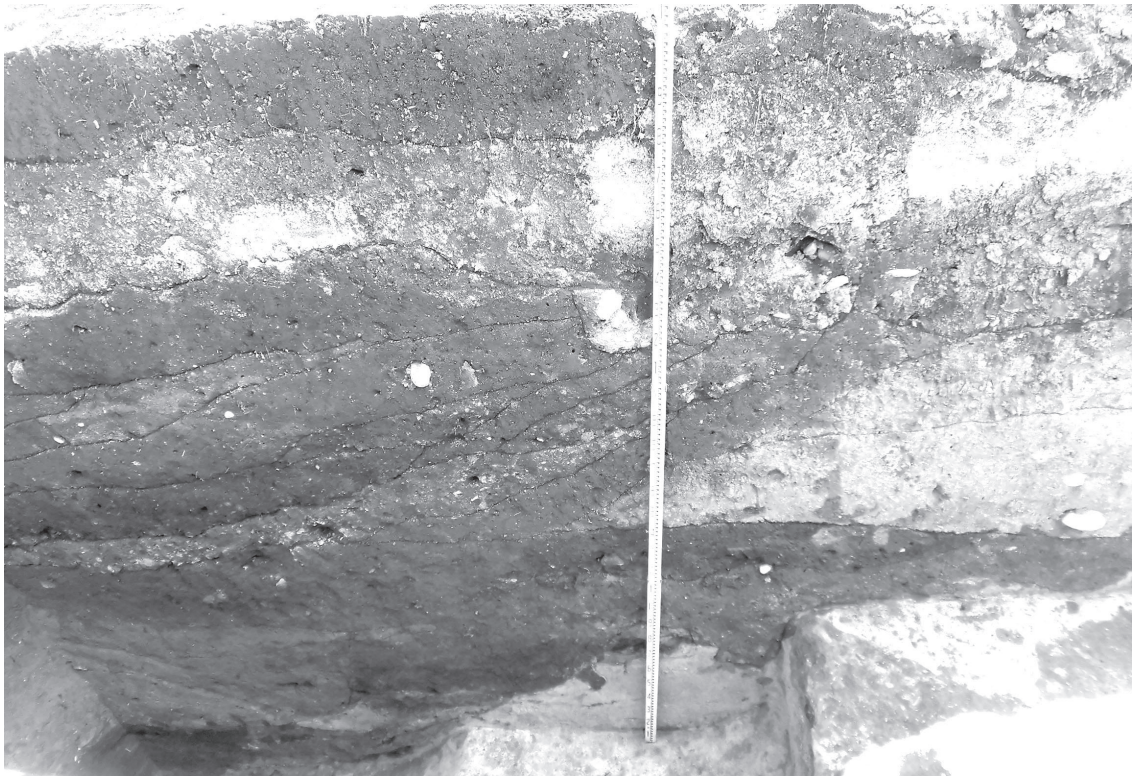


写真４　１トレンチセクション

発掘調査報告書　抄録

ふりがな	あんなかじょう さん
書名	安中城Ⅲ
副書名	安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ番号	
編集者名	関根史比古、鳥居貴庸
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379-0292　群馬県松井田町新堀245　TEL 027 - 382 - 1111
発行年月日	西暦2020年（令和2年）3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号（略称）					
あんなかじょう さん 安中城Ⅲ	あんなかしあんなか 安中市安中 にしまち 3丁目字西町 21－1	102113	1518（D-32）	36°32′53″	138°53′48″	20190507 ～ 20190515	455㎡	学童クラブ 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安中城Ⅲ	城館跡	古墳・古代	なし	土師器、須恵器	近世期の堀よりも下層で検出した堀である。遺構に伴う遺物が検出されなかったため、正確な時期比定は困難であるが、近世期の堀との前後関係、堀の形状、安中城に関連する文献から中世期の堀と判断
		中世	堀 土塁		
		近世	堀 土塁	陶磁器、土師質土器	

（要約）
本遺跡では、中・近世期安中城の堀跡を検出した。調査区は『安中町誌』等に掲載されている安中城図から見る限り、安中城南側の堀に該当する場所である。調査の結果、近世期の堀は、調査区の東西方向へ直線的に廻ることが判明した。安中城図では、東西方向から調査区内で南方向に直角する堀が描かれていたが、図のような堀の走行は認められなかった。
中世期の堀は、遺物がほとんど出土していないことから、時期比定が困難であった。しかし、深さ4m以上という堀の形状が一般的な中世期の堀と一致することや、近世期の堀との前後関係、文献資料等を考慮すると中世期に構築された堀と推定できる。
安中城Ⅲの発掘成果から、一部ではあるが中・近世期安中城の堀の実態が明らかとなった。

安中城Ⅲ
―安中地区学童クラブ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―
発　行　日　令和2年3月31日
編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市松井田町新堀245
印　　刷　上毎印刷工業株式会社
群馬県前橋市天川大島町305-1